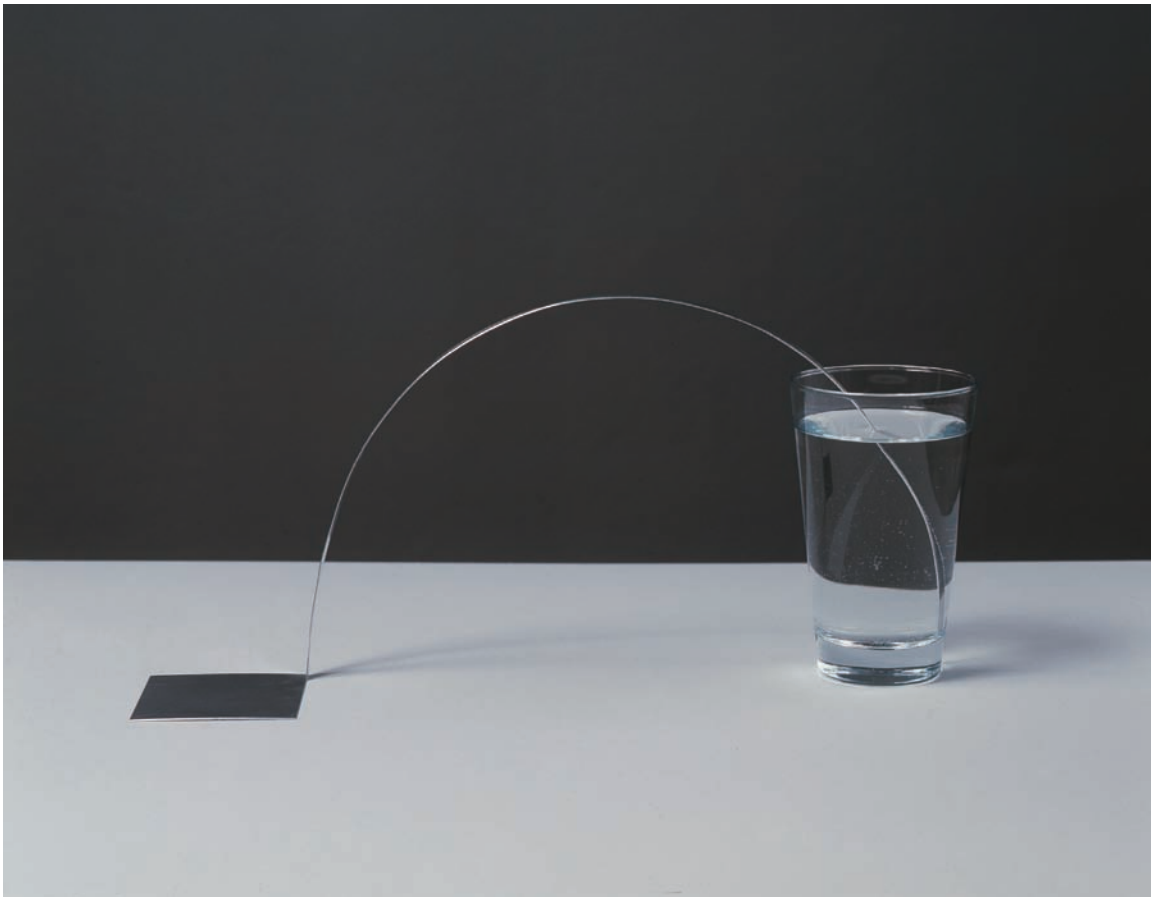
2025.3.7



鴨治晃次《静物》2003/2013
水、グラス、アルミニウム板
作家蔵、photo: Hans-Wulf Kunze

ポーランドより66年ぶりの帰国展

鴨治晃次 展｜
不必要な物で全体が混乱しないように

会期：2025年4月8日［火］→6月22日［日］

休館日：月曜日（5/5開館）　開館時間：11時より19時まで
入館料：大人 1,500円 / 大人ペア 2,600円　/学生（25歳以下）・高校生・70歳以上の方・身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳お持ちの方、および介助者（1名様まで）1,300円 / 小・中学生 500円

主催：ザヘンタ国立美術館／アダム・ミツキェヴィチ・インスティテュート／ワタリウム美術館
協力：ポーランド広報文化センター
本展は、ポーランド共和国 文化・国家遺産大臣ハンナ・ヴルブレフスカ氏の名誉後援による展覧会です。

会場：ワタリウム美術館
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前3-7-6　Tel：03-3402-3001　Fax：03-3405-7714　Email：official@watarium.co.jp
URL：http://www.watarium.co.jp

キュレーター：マリア・ブレヴィンスカ（ザヘンタ国立美術館、ワルシャワ）
オーガナイザー：和多利浩一／和多利恵津子（ワタリウム美術館）／アガタ・オピェカ／ハルシカ・コステツカ／マルヴィナ・マリノフスカ
制作：カロリナ・イェジエルスカ＝ポモルスカ／アンナ・ムシンスカ＝ベウツ
コンサヴァター：ナオコ・カモジ
展示コミュニケーション：ゾフィア・コチュニェフスカ／ミレーナ・リーベ／アレクサンドラ・シエンキェヴィチ／アリッチャ・シュナイデル／ユスティナ・ヴィドラ／ヨアンナ・アンドゥルスコ／ユスティナ・ラスコフスカ

ZACHĘTA　Ministry of Culture and National Heritage Republic of Poland　ADAM MICKIEWICZ INSTITUTE　WATARI-UM The Watari Museum of Contemporary Art　ポーランド広報文化センター INSTYTUT POLSKI TOKIO

鴨治晃次、インスタレーション「静かさと生きる意志」（ザヘンタ国立美術館、2018）を背景に立つ鴨治晃次, photo by Marek Krzyżanek

僕の仕事

何が正しい位置なのか。

正しい位置を探すこと。

探すことに戻ること。

多分そのことが仕事をする上でいちばん大事なことに思える。

1970年頃だったと思う、どうやったら石の存在を絵という平面に移すことができるのか僕は苦しんでいた。壁に立て掛けたかなり大きな白い画面と石の前に座って、その石の存在に対応する一つの点を鉛筆で画面の中に点をつけて探していた。その一点を探すことだけがその頃の僕の仕事であった。ある時には2～3cm右にまたは左に動かして。自分にとって正しいと思う大きな石に対応する点の位置を探していた。そして別の日にその一点を通った垂直線を引く。僕にとってそれはその石の存在と石を取り囲んでいる空気と空間を表現できる手がかりのように思われた。そうして出来た4枚の作品はワルシャワのフォクサル・ギャラリーに展示され、僕はその作品に『二つの極』という名をつけた。

４枚の作品はギャラリーの床に置かれた石の対極として生まれたものだが、それが成功したかどうかを客観的に証明することは不可能だと思わる。しかしそれ以後正しい位置、正しい場所を探すことは僕の仕事にとって唯一の目的になったように思われる。

このたび展示された全ての作品は同じ目的、正しい場所を探す過程で生まれたものだ。僕にとって作品は石の存在の受け取りであり、自分の気持ちの集合体とでも言えるかもしれない。垂直の線は精神の集中の方向だ。

透明性と

単純性を目指し

不必要な物で全体が混乱しないように。

２０２５年 某日

鴨治晃次

主な展示予定作品

本展は、現在もポーランドを拠点に活動を続け、今年90歳を迎える鴨治晃次（以下、鴨治）の日本で初めての本格的な展覧会です。1960年代から今日までに制作された約20点の絵画、9点の立体作品、80点のデッサン、3点のインスタレーションが展示され、鴨治の小回顧展としてポーランドのザヘンタ国立美術館とアダム・ミツキェヴィチ・インスティテュートによって企画されました。
鴨治は、画家・インスタレーション・オブジェ作家として、1960年代から今日までポーランドのアートシーンで活躍。鴨治の芸術的成果はポーランドの美術史とその文化遺産に永久に刻まれており、作品はポーランドの主要美術館で観ることが出来ます。鴨治の芸術のルーツは現代美術の伝統（西洋とポーランドの戦後美術）と日本の伝統の双方にあります。

本展で展示されている初期の作品群は作家の制作活動の出発点を思い起こさせる重要なもので、鴨治が1967年から作品展示をしているワルシャワの伝説的なフォクサル・ギャラリー（1966年開廊）と深く関係しています。
中でも**《お寺の壁に》シリーズ（1963-1967）**や**《ラグーン》（1964-1967）**などの、1960年代半ばに制作された**《プルシュクフ絵画群》**と呼ばれる彩色した板に穴を開けたレリーフのような絵画シリーズは、鴨治の作家活動の中でも非常に重要な存在で、これらの作品の特徴は素材のシンプルさであり、これは作家の他のすべての作品にも共通しています。

鴨治晃次、初の個展（フォクサル・ギャラリー）にて、ワルシャワ、1967

鴨治晃次《虹》1965、油彩、金属、合板、コンクリートブロック、
作家蔵、photo by Maciej Landsberg

鴨治晃次《お寺の壁に》「プルシュコフの絵」シリーズより、1965、
油彩、合板、木、coll. Studio Gallery, Warsaw,
photo by Maciej Landsberg

鴨治晃次《二つの極》1972、インスタレーション、ウッチ美術館所蔵、photo by Maciej Landsberg

抽象絵画と中央に置かれた石のインスタレーション作品**《二つの極》(1972年)**は、日本の伝統に影響を受けています。作家の「適当」、つまり正しい線の位置、石の位置の探究の軸となるものであり、このインスタレーションはその長い探究の過程をまとめたものといえます。

また鴨治の作品では、しばしば私的な体験を想起させる要素がみられます。例えば1950年代末のポーランドへ向かう長期間にわたる船旅で体験した空間、空気、水に関連した要素が例に上がります。また、作品**《佐々木の月》(1995)**では友人の自死という悲劇的な出来事への回帰が作品として表現されています。

鴨治が大切にしているのは身の回りのものに対する姿勢です。それは小さなもの、記憶、物語から生まれる**《静物》(2003年)**でも表現されています。

鴨治晃次《 佐々木の月》1995
鉛筆、電線、合板、アルミニウムシート、ウッチ美術館所蔵
photo: Hans-Wulf Kunze

鴨治晃次《静物》2003/2013
本、数珠、アルミニウム板、写真,
作家蔵、photo: Maciej Landsberg

鴨治晃次《デッサン》、2012、紙、墨、アクリル絵具、
作家蔵、photo by Marek Krzyżanek

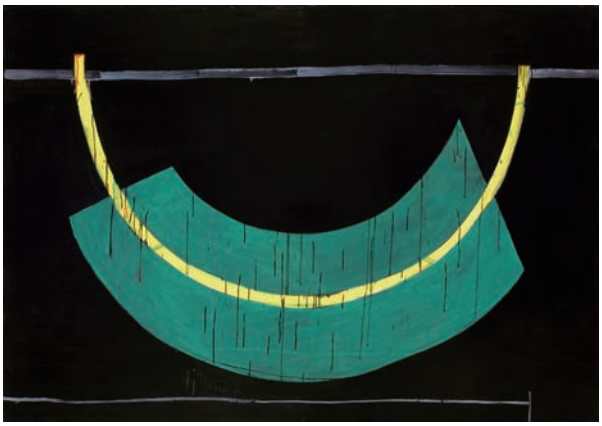
鴨治晃次《通り風/老年》、1975/2018、和紙、糸、
作家蔵、photo by Maciej Landsberg

鴨治が数年かけて制作した一連の**《デッサン》(2011-2015)**では、一貫して紙と筆と墨と白い絵具だけを使った最もシンプルな方法と形を追求しています。その制作技法は墨という伝統的な画材だけでなくヨーロッパの抽象画の起源や、芸術における精神性の探究にも言及しています。制作の反復、徹底した集中力、ミニマリズムといった霊的な側面も見ることができます。作品は作家の生活や物事、世界の本質に触れたいという願望から生まれたものであり、空間の無限性・水の性質・空気を表現しようとする象徴的表現への取り組みが見られます。これは自然の本質を直感的に理解しようとする試みであると言えます。

また穴の空いた和紙で構成されたインスタレーション**《通り風》(1975年)**も時空を表現します。それは時間の経過を意味し、私たちが永久にさらされ続ける過程を指します。内なる鍛錬と直感によって、鴨治は半世紀以上にわたって人生と共にある芸術、そして切り離すことのできない精神的な経験とを一つに結びつけてきました。自らのルーツである日本、現代美術への深い造詣、そして芸術的自己認識といった様々な文化の交差点で制作活動をしてきました。鴨治は世界的な芸術家であり、その芸術は普遍的な次元に到達しているといって過言ではないでしょう。
今回のワタリウム美術館での小回顧展は作家へのオマージュでもあると言えます。

マリア・ブレヴィンスカ(本展キュレーター)

鴨治晃次《水の底》1992、アクリル絵具、キャンバス、
Muzeum Górnośląskiego w Bytomiu 所蔵
photo: Hans-Wulf Kunze



鴨治晃次《夜の雨》、1992、アクリル絵具、キャンバス、
Muzeum Górnośląskiego w Bytomiu 所蔵
photo: Hans-Wulf Kunze

鴨治晃次（KAMOJI Koji 1935~、日本）　略歴

鴨治晃次（以下、鴨治）、戦後のポーランド芸術の主流を築いた、1960〜70年代を代表する前衛芸術家の一人である。

1935年東京生まれ、1953年から1958年にかけて武蔵野美術大学で麻生三郎、山口長男に師事。伯父の梅田良忠（東欧史学者、ポーランド文学翻訳家、ワルシャワ大学日本語講師）の話に影響を受け、ワルシャワ留学を決意。1959年、ポーランドへの船旅に出る。2ヶ月半の航海で感じた空間、水、空気の感覚はその後の鴨治の作品に大きな影響を与えた。

1960年ワルシャワ美術アカデミー入学。著名な画家アルトゥール・ナハト−サンボルスキーのもとで学び始め、1966年に修了。1965年クラクフのクシシュトフォリー・ギャラリーでレシェック・ヴァリツキとともに初めての展覧会を開催。アカデミー卒業後、1967年には伝説的なフォクサル・ギャラリー（Foksal Gallery）（1966年設立）で活動を始め、その活動はポーランド現代美術の発展史において重要な役割を果たしてきた。ヘンリック・スタジェフスキ,エドワード・クラシンスキ、タデウシュ・カントル、ズビグニェフ・ゴストムスキなど当時のポーランドを代表するアーティストたちとともに、ポーランドの前衛アートシーンを積極的に創っていった。

主な個展

1967年　フォクサル・ギャラリー/ Galeria Foksal、ワルシャワ、ポーランド
1971年　「空気-部屋-空間」、フォクサル・ギャラリー、ワルシャワ、ポーランド
1972年　「二つの極」、フォクサル・ギャラリー、ワルシャワ、ポーランド
1975年　「四つの展覧会」：穴、通り風、線、鏡、ギャラリー、ワルシャワ、ポーランド
1978年　「場所」、　DESA近代美術パビリオン/ DESA Galeria Sztuki Nowoczesnej Pawilon Nowa Huta、クラクフ
1984年　「人間」、フォクサル・ギャラリー、ワルシャワ、ポーランド
1986年　「中世」、フォクサル・ギャラリー、ワルシャワ、ポーランド
1988年　「芭蕉」、彫刻ギャラリー/ Galeria Rzeźby、ワルシャワ、ポーランド（ヴォジミエシュ・ボロスキとの合作）
　　「アウシュビッツの石」、彫刻ギャラリー、ワルシャワ、ポーランド
1990年　「穴-風-石 」[回顧展]、ウッヂ美術館/ Muzeum Sztuki in Łódź、ウッヂ、ポーランド
1991年　「ピラミッドの中の湖」、フォクサル・ギャラリー、ワルシャワ、ポーランド
　　「夏の午後」、彫刻ギャラリー、ワルシャワ、ポーランド
1992年　「夜」、フォクサル・ギャラリー、ワルシャワ、ポーランド
1993年　「俳句 „雨”」、図書館ギャラリー/ Galeria Biblioteka、レギオノヴォ、ポーランド
1994年　「俳句 „水”」、図書館ギャラリー、レギオノヴォ、ポーランド
　　「影の中に」、フォクサル・ギャラリー、ワルシャワ、ポーランド
　　「空の底」、エドワード・クラシンスキのアトリエのテラス、ワルシャワ、ポーランド
1996年　「S.佐々木に捧げる月」、場所ギャラリー/ Galeria Miejsce、チェシン、ポーランド
1997年　「葦舟と他の作品1963-1997 」[回顧展]、ウヤズドフスキー宮殿現代美術センター、ワルシャワ、ポーランド
1998年　「冬のデッサン」、スタラ/ギャラリー/ Galeria Stara、ルブリン、ポーランド
　　「7つの部屋の作品展」、鴨治晃次 1998、ビトム上シレジア博物館、ビトム、ポーランド
2001年　「穴-月-静寂」、86 ギャラリー/ Galeria 86,、ウッヂ、ポーランド
2003年　「静物」、フォクサル　ギャラリー、ワルシャワ、ポーランド
　　「石のベンチと丸い池」、ゲオリウム公園/ Georgium Park、デッサウ、ドイツ
　　「水」、クロスター・ウンザー・リーブン・フラウエン美術館、マクデブルク、ドイツ
　　「貯水所の中の水」、ウヤズドフスキー宮殿現代美術センター、ワルシャワ、ポーランド
2004年　「青いテープと影」、フォクサル・ギャラリー、ワルシャワ、ポーランド（エドワード・クラシンスキとの合作）
2006年　「夕方− 葦舟」、スタルマフ・ギャラリー/ Galeria Starmach、クラクフ、ポーランド
2008年　「プルシュコフの絵」、フォクサル・ギャラリー、ワルシャワ、ポーランド

2013年　「庭の小径」(回顧展)、クロスター・ウンザー・リーブン・フラウエン美術館、、マクデブルグ、ドイツ
2016年　「川」、ポーランド芸術家協会/Okreg Warszawski ZPAP、ワルシャワ、ポーランド
2017年　「街への祈り」、フォクサル・ギャラリー財団、ワルシャワ、ポーランド
2018 年　「静かさと生きる意志」、(回顧展)、ザヘンタ国立美術館、ワルシャワと日本美術・技術博物館マンガ、クラクフ、ポーランド
2020年　「小石たち」、フォクサル・ギャラリー財団、ワルシャワ、ポーランド
2021年　「土と空気のデッサン」、シグナム財団ギャラリー、ウッヂ、ポーランド
2021年　「場所の意味」、カジミエシュ・ドルニ・ナドヴィシランスケ博物館、カジミエシュ・ドルニ、ポーランド
2022年　「握りつぶされた紙」、フォクサル・ギャラリー、ワルシャワ、ポーランド　（ミロスワフ・バウカとの合作）

主なグループ展

1972年　「アトリエ-72 」、リチャード・デマルコ・ギャラリー、エディンバラ、スコットランド
1979年　ヴォジミエシュ・ボロフスキ、鴨治晃次、エドワード・クラシンスキ、ヘンリック・スタジェフスキ、Dom Artysty、ワルシャワ、ポーランド
1981年　「現代の絵画　東欧と日本」、国立国際美術館、神奈川県立県民ギャラリー、日本
1982年　「アーティストの交流展 1931-1982 ポーランド- アメリカ合衆国」、パリ市立近代美術館、パリ、フランス
1983年　「芸術的な対話展 1931-1982ポーランド- アメリカ合衆国」、国立アルスター博物館、ベルファスト、北アイルランド
1988年　Geometria es metafora, Kiallitas a Chelmi Korzeti Muzeum Anyagabol, Budapest Galeria, ブダペスト、ハンガリー
1991年　ウッヂ美術館　20世紀美術コレクション展, Galeia Zachęta, ワルシャワ、ポーランド
1992年　Actualite, Musee d`Art Contemporain de Lyon+ELAC, リヨン, フランス
　　20世紀アートの国際コレクション展, ウッヂ美術館、ウッヂ、ポーランド
1997年　「ポーランドからの芸術展1945-1996」、The Budapest Hall of Art or Palace of Art/Mucsarok、ブダペスト、ハンガリー、
　　Contemporary Art Centre/ Šiuolaikinio meno centras、ヴィリニュス、リトアニア、Makslas muzeja Arsenals、リガ、ラトビア、
　　Tallinna Kunstihoone、タリン、エストニア
　　「絵画の境界線　90年代のポーランド絵画」、ウヤズドフスキー宮殿現代美術センター、ワルシャワ、ポーランド
1999年　「世代　世紀末／前世紀のポーランド芸術展」, Centralny Salon Wystawienniczy Maneż、サンクトペテルブルク、ロシア
2003年　Labirynt. Labirynt 2 Gallery presents Contemporary Polish Art、UH Galeries、Hartfield、Folly Gallery、ランカスター、イギリス
2007年　「Wasser. Ströme. Zeiten Die Elbe [in] between」、クロスター・ウンザー・リーブン・フラウエン美術館、マクデブルク、ドイツ
2009年　「We see you、The Foksal Gallery Activities 1966- 1989」、Kumu Art Museum、タリン、エストニア
2013年　「KISS. Warhol. Topol. Kamoji. Krasiński. Stażewski」、スタジオ・ギャラリー/ Galeria Studio、ワルシャワ、ポーランド
2013年　「存在へのアプローチ—暗闇、無限、日常 ポーランド現代美術展」、京都市立芸術大学ギャラリー・アクア、京都、日本
2015年　「浮世絵との会話」、ビャウィストク・ポドラスケ博物館Muzeum Podlaskim Białystokと日本美術・技術博物館マンガ/
　　Muzeum Sztuki i Techniki Japońskiej „Manggha、クラクフ、ポーランド
2024年　「ラビリントの100年」、ラビリント・ギャラリー/Galeria Labirynt、ルブリン、ポーランド

主なパブリック・コレクション

•ワルシャワ国立博物館/ Muzeum Narodowe w Warszawie、ポーランド
•ヴロツワフ国立博物館/ Muzeum Narodowe we Wrocławie、ポーランド
•ウッヂ美術館/ Muzeum Sztuki in Łódź、ポーランド
•クラクフ現代美術館/ Museum of Contemporary Art in Kraków、ポーランド
•ビトム上シレジア博物館/ Muzeum Górnośląskie w Bytomiu、ポーランド
•Muzeum Ziemi Chełmskiej　im. Wiktora Ambroziewiczaw Chełmie、ポーランド
•日本美術・技術博物館マンガ/ Muzeum Sztuki i Techniki Japońskiej „Manggha、ポーランド
•ザヘンタ国立美術館/ Zachęta – Narodowa Galeria Sztuki、ポーランド
•ウヤズドフスキー宮殿現代美術センター/ Centrum Sztuki Współczesnej Zamek Ujazdowski、ポーランド
•クロスター・ウンザー・リーブン・フラウエン美術館/ Kunstmuseum Kloster Unser Lieben Frauen Magdeburg、ドイツ
•The Museum of Contemporary Art, Los Angeles、アメリカ合衆国
•フォクサル・ギャラリー/ Galeria Foksal、ポーランド
•スタジオ・ギャラリー/ Galeria Studio、ポーランド

受賞・叙勲歴

1975年　C.K.ノルウィッド美術批評賞/Cyprian Kamil Norwid’s Award
2015年　ヤン・ツィビス賞/ Nagroda im. Jana Cybisa
2020年　カタジナ・コブロ賞/ Nagroda im. katarzyny Kobro
2024年　ポーランド文化功労/ Medal „Zasłużony Kulturze Gloria Artis”

鴨治晃次- なぜポーランドなのか

鴨治晃次（以下、鴨治）は1935年東京生まれ、1959年からポーランドに移り住み、制作活動をしている。鴨治はポーランドのアーティストとなった日本人だ。1953年から58年にかけて、武蔵野美術大学で麻生三郎、山口長男両教授のアトリエで学ぶ（1958年卒業）。母方の伯父である**梅田良忠**と親類の**工藤幸雄**はポーランド文学の翻訳家であった。23歳で学業を終えて日本を離れる決心をしたとき、鴨治はポーランドを選んだ。彼の背後には、後に多くの作品にインスピレーションを与えることになる友人、佐々木昌治の自死という悲劇的な体験があった。伯父の梅田良忠は鴨治にとって身近な存在だった。初めての個展を企画したのも梅田良忠で、その話や会話に影響され鴨治はポーランドにわたる決意をした。

当時、多くの日本人画家がその才能を磨くためにヨーロッパに渡り、その多くは芸術の都パリを選んだ。後年、鴨治はこう語っている「私は少しへそ曲がりでみんながパリに行くなら僕はポーランドに行こうと思ったんです。それにここから（ワルシャワ）パリまではそう遠くないだろうと思ったんです」。

1959年4月24日鴨治は商船「ステファン・オクシェイヤ号」でポーランドに向けて出航した。2ヶ月半の航海の後、1959年7月16日にグディニャ港に到着。長い航海、水、空気、空の体験は、その後の画家の作品に大きな影響を与えた。グディニャ港で鴨治はヴィエスワフ・コタンスキ教授（ワルシャワ大学の著名な日本語学者・翻訳者）と米川和夫に迎えられた。ポーランドに到着後、鴨治はウッチのポーランド語学校で1年間ポーランド語を学んだ。その後、ワルシャワ美術アカデミーでアルトゥール・ナフト＝サンボルスキー教授のもとで学ぶ（1966年卒業）。ポーランド留学はポーランド文化芸術省から6年間の奨学金を得て実現した。

鴨治の旅は伯父である**梅田良忠（うめだ りょうちゅう 1900-1961）**の旅と関連している。1922年、梅田良忠（鴨治の母方の兄）は、禅宗哲学を学んだ23歳の若さで、ヨーロッパでの哲学研究のため船旅に出た。東京の仏教大学から奨学金を得てベルリンで学ぶことになっていた。航海中、彼はシベリア鉄道と東清鉄道の建設に携わる公務員の息子で、後に第二次世界大戦中に空軍中佐となった**スタニスワフ・ミホフスキ（1900-1952）**と出会った。1920年から上海に住んでいたミホフスキは日本語を話し、旅先でポーランドのことをよく話していた。二人は友人になり、梅田は後にワルシャワに定住することを決めた。梅田は1939年9月までの長期間ポーランドに留まった。

梅田良忠はポーランド語を学んだ。1924年頃、学生だった彼は廃業した宿舎に単身移り住み、狩猟犬小屋の世話をしていた。友人のコンスタンチン・ガウチンスキ（著名な詩人・作家）が訪ねてきて、この建物に現在も使われている「黄色い宿」という名をつけた。梅田はワルシャワ大学でポーランド初の日本語教師となった。1926年から1939年までワルシャワの東方学院に勤務。ポーランド文学の翻訳にも携わる（ヘンリク・シエンキェヴィチの『Quo vadis』を日本語に翻訳）。前衛文学グループ、クファドリガを中心としたワルシャワの文学界と関わる。

梅田良忠は第二次世界大戦をブルガリアで過ごし、その後しばらくは共産主義のポーランドに来ることができなかった。生前、彼は息子の**梅田芳穂（うめだ よしほ 1949-2012）**がポーランドに永住し、彼の意志を引き継ぐことを希望していた。梅田良忠は1961年に亡くなる前に洗礼を受け、ポーランド名のスタニスワフを与えられた。彼の遺灰はワルシャワのポヴォンスキ軍事墓地に埋葬されている。

梅田良忠の遺言通り、息子の梅田芳穂は父の死後ポーランドに渡り、その後永住した。当時13歳だった彼は、ヤジュジェフスキ教授の家族と一緒にウッチに定住した。1968年から1975年までワルシャワ大学でポーランド言語学と美術史を学び、日本企業のポーランド駐在員事務所に勤務。1976年からは、労働者防衛委員会および社会的自衛委員会「KOR」の協力者として反政府活動（当時ポーランドは共産主義国）に参加。第二次（地下）流通に必要な印刷資材のポーランドへの輸入に携わる。グダニスクで開催された第1回全国代表者会議に参加し、マゾフシェ地方でラジオ「S」を共同創立した。東京でポーランド中央公文書館を組織。戒厳令が敷かれた後ポーランドから追放されたが、フランスで地下連帯運動の支援に携わった。1980年代末にワルシャワに戻り、ビジネスを始め、京都議定書の導入に尽力した。梅田芳穂は、著名な日本人作家アグニェシュカ・ジュワフスカ（詩人で作家のユリウシュ・ジュワフスキの娘）と結婚。友穂、ユリア、そしてビジュアルアーティストで古典地唄舞の名取でもある波那の3人の子供がいた。ワルシャワのポヴォンスキ軍事墓地に埋葬されている。

工藤幸雄（くどう ゆきお 1925 - 2008）は鴨治の伯母の後夫で、日本の詩人、ロマン主義者、ポーランド学者、多摩美術大学教授であった。東京大学でフランス文学を学ぶ。1967年から1974年までワルシャワ大学東洋学研究所で日本語教師を務める。1995年、レフ・ワウェンサ大統領よりポーランド共和国功労勲章中佐十字章を授与される。1999年、ブルーノ・シュルツ全集の翻訳で読売文学賞を受賞。その他、ヴィトルド・ゴンブロヴィッチ、チェツスワフ・ミウォシュ、ヴィエスワヴァ・シンボルスカなどポーランド文学の翻訳多数。

ザヘンタ国立美術館とは

ザヘンタ国立美術館（Zachęta National Gallery of Art ）は、社会文化的生活の重要な要素として現代美術を普及させることを役割とする機関です。20世紀および21世紀の最も興味深い芸術表現が紹介される場所です。ザヘンタ国立美術館は、絵画、彫刻、インスタレーション、ビデオ、グラフィック、パフォーマンスなど、3700点近い作品を所蔵しています。ザヘンタ国立美術館は、70年以上にわたり、世界で最も重要な美術展のひとつであるヴェネツィア・ビエンナーレのポーランド館および建築ビエンナーレの展示を監督し、企画するという任務を担ってきました。

www.zacheta.art.pl

アダム・ミツキェヴィチ・インスティテュートとは

アダム・ミツキェヴィチ・インスティテュート（Adam Mickiewicz Institute、略称 IAM）は、ポーランド文化を世界中の観客に紹介しています。国が設立した機関として、IAMはポーランド文化や芸術に対する長期的な関心を育み、ポーランド人アーティストの国際舞台での存在感を高めています。革新的なプロジェクトを立ち上げ、国境を越えたコラボレーションを支援し、高い評価を得ているポーランド人クリエイターや新進気鋭のクリエイターをプロモーションすることで、ポーランドの文化の多様性と豊かさを紹介しています。また、ポーランド文化に関する総合的なオンラインリソースであるCulture.plの運営も行っています。

問い合わせ先

ワタリウム美術館 Tel:03-3402-3001 Fax:03-3405-7714 official@watarium.co.jp
公式ホームページ：http://www.watarium.co.jp/

※ 内容が更新・変更した場合、公式ホームページ／SNSにて随時公開していきます。